

公開講演会記録

中国語を生涯の友として

元会議通訳者 神崎多實子

プロローグ

「ブワウーッ」。突然、空気を震わせる凄まじい汽笛の音に、母に抱かれ見送りの人に手を振っていたわたしは、慌てて母の首にしがみついた。汽船は門司港の岸壁を静かに離れ、中国大陸の北の港、大連を目指し出航した。

1937年4月のことである。

この時、家族は父（37歳）、母（29歳）、兄（8歳）、姉（5歳）と2歳未満のわたしの一家五人。それにお手伝いさんが一緒だった。

これは後に母がわたしに語ってくれたことだが、日本を離れる前には、伊

勢神宮を参拝し、父の故郷広島に立ち寄ったとか。

父は、理化学研究所（以下、「理研」と略称、注）で放射性鉱物研究に取り組んでおり、すでに博士号を取得、中堅研究員として活躍していた。その後理研が中心となって1935年3月、「満州」における資源の「開発利用」を目的とする総合的な科学研究機関として首都「新京」に「大陸科学院」（現長春応用化学研究所）を設立した。父のメモによると、1936年に「満州」の主要都市をはじめさらに山海関を越え、北京や天津、通州（河北省）にも足を運び、治安状況なども含

め渡航前の調査をしたものである。

父は「満州」で引き続き放射性鉱物の研究に従事するため大陸科学院に赴任することになり、1937年、一家をあげて「新京」に移住した。

父は、「満州」という新天地に大きな夢と希望を抱き、それから八年後、国家が崩壊し環境が激変することになろうとは夢想だにしていなかったのだろう。

だが、移住した年の7月7日に起きた盧溝橋事件を口実に、日本は中国への全面戦争を開始した。1945年8月15日敗戦、「満州」で敗戦の日を迎えた多くの日本人は、その日から国によるすべての庇護を失った。無政府状



NHK のスタジオにて（2020年8月）

態の混乱が続く異国の地にあって、誰もが自らの才覚で生き延びることを強いられた。それ以外に選択の余地はなかったのである。

比較的裕福であった私たち一家の生活は敗戦によって一変し、それから2年、最愛の母が結核を病み、再び日本の地を踏むことなく急逝した。その日からわたしの多難な人生が始まる。

やがて1949年10月、全土を制覇した中国共産党によって中華人民共和国が成立し、父は引き続き「留用」された。

こうしてわたしは戦中戦後の激変の期間、16年にわたって中国で暮すことになり、いまでも中国語にこだわり続け、中国とかかわることになる。つまり、冒頭で述べた一九三七年の移住が、わたしの人生行路を決定したのだった。

注：理研 1917年3月、政府からの補助金、民間からの寄付金をもとに東京文京区駒込に創立。「機械工業の時代から理化学工業時代に大転換を遂げつつある世界の趨勢を説き、日本

の基礎科学の振興を訴えた」科学者、実業家の高峰譲吉が、産業界の大御所渋沢栄一らの賛同を得て設立した。

「三つの中国」の狭間で

●「満州国」時代——幼き日々

幼少のころ、「新京」北安路のわが家の周辺は多分「満州国」官吏の住宅



①自宅玄関前で（1938年冬）



②自宅応接間にて

地だったのだろう、隣は朝鮮人、裏には「満人」（と言っていた）が住んでいた。隣の朝鮮人の男の子とは言葉が通じなくても遊んだりした覚えがある。ただ、中国人との接点はほとんどなく、わずかに母と一緒に買い物に出かけるときに乘るマーチョ（馬車）の馭者や家の前でサーカスもどきの大道芸を演じる悲しそうな少女のことぐらいで、「可哀そうな人ね」と思っていた。そのころ、大人たちがよく言っていた言葉に「ニーヤ」がある。それは中国人の代名詞のように使われていたが、多分中国語では「你呀」（ニーヤー）、相手に対する非難めいた言葉、「お前」といった意味の言葉に由来するのかもしれない。

当時の「新京」は東洋のユートピアと言われ、極寒の地でも、暖房が通れば家の中は温かく、トイレは水洗、白系露人のお店チューリン（秋林）に行けば、ジャムパン、クリームパンなどが並んでいた（写真①②）。

写真①は、玄関前。大連辺りで買いたのだろうか、今では生物保護法に違反しそうな「シューバー」といわ

れたヤマネコのオーバーを身にまとっている。写真②は自宅の応接間、ただ、わが家のサイドボードには、人形などはなく、石ころだらけだった。父が、興安嶺などの山奥に出向いては、ウラン鉱を探し求めていたからである。部屋を暗くすると、不思議な青い光を発する螢石などもあった。

「新京」には、十数校の日本人小学校があった。教科は、「大陸事情」があるほかは、ほぼ内地と変わらず、先生も優しく、楽しい思い出が詰まっている。冬の体操（と言っていた）の授業はスケート、先の尖ったスピードスケートを履いて、校庭のリンクを一周すると凍てつく寒さも吹き飛んだ。音楽も「粉雪さらさらっ、街の粉屋も夜は更けて、ロバの目かくし外すころ…」など「満州」特有の抒情的な歌が多かった。

だが、1941年12月8日、太平洋戦争に突入してからは、徐々に戦時色が濃くなっていく。スケートは、雪の中の「進軍」に変わり、歌も軍歌が多くなった。習字も「不自由をつねと思

えば不足なし」、「欲しがりません、勝つまでは」のような節約や儉約を提唱するスローガンが増えてきた。

先の写真、見るからに幸せそうだが、実は手元に数葉しか残っていない。1945年8月疎開する間に、父がアルバムごとお風呂の焚口へ放り込み、燃やしてしまったからである。炎に映える父の形相を目の当たりにしてわたしは事の重大さを悟った。この炎とともに、数年にわたる「満州」の思い出は、一瞬にして灰と化してしまったのである。これらの写真は、母が日本に送っていたものを1953年に帰国したときに祖母が返してくれたものである。

思えば、当時「満州」の北の国境付近では、移住した日本人開拓民と土地を奪われた中国人農民とが対峙し、華北では日本軍による激しい戦闘がくり広げられていることなどわたしは知る由もなかった。

一方、同じ「新京」の中国人学校では、日本人学校とは異なる差別的な教育が行われていた。

いまでも交流のある、当時「新京」在住の中国人の友だちに尋ねてみた。

「小学校のころ、スケートしていた？」

「スケートなんか誰も持っていないから、やれるはずないでしょ。体操の時間は、騎馬戦なんかやっていた。それにしても毎日ヤオバイばかりやっていたなあ」。

「ヤオバイ」？、それが「遥拝」だと分かるまでに少々時間を要した。中国語の辞書を引いても、これはすでに死語になっている。日本人学校でも、毎朝朝礼があつてご真影を拝み、宮城遥拝をしていたが、彼ら（中国人）の遥拝は毎朝、東西南北各3回、計12回もお辞儀をするのだそうだ。「誰に向かってするの?」「よく分からないけど、たしか天照大神テイエンサオダーシエンって言っていた」。

わたしがスケートに夢中になっていたころ、彼らは同じ「新京」の片隅で、例えば「国語」の授業は、中国語と日本語が半々で、毎日、日本語を勉強していたそう。なかには日本語通訳二級程度の試験に合格する生徒もいたが、

いくら日本語を勉強してもどうせ2、3年のうちに使い道がなくなると秘かにうわさされていたとか。しかも冬季は毎日暖房用の薪持参で通学していたそう。

これが当時大いにもてはやされた「王道楽土、五族協和」の実態だった。

●敗戦、国共内戦の時代

1945年8月9日、ソ連軍侵攻。

「勝利、勝利」の宣伝に惑わされてきた在留邦人は、この日を境に大混乱に陥り、父の勤務先の大陸科学院一行は郊外の「浄月譚」（現長春国立森林公園）に疎開することになった。

一方、関東軍に帰属していた母方の親戚は、早くも12日には先を競って「新京駅」から列車に飛び乗り、途中シベリアへ連行された大叔父を除き、家族は朝鮮を経由して帰国する。わたしは「叔母様一家は、電話もしないで帰っちゃった」と母が嘆いていたのを覚えている。天皇の一種独特な声で始まる玉音放送は、疎開先の浄月譚で聞いた。大人たちがみな涙するので、わ

たしも訳も分からずに泣いた。

この後、引き揚げで帰国した日本の友だちもいたが、父が「留用」されたため、わたしは引き続き長春に居残ることになった。戦後、日本人小学校が再開されたのは、新憲法が公布され「日本は神の国ではなくなりました」と教わったので、おそらく1946年11月ごろ。校舎は「満州電信電話」の独身寮を改装したもので、校名は「日籍留用技術員工子弟学校」に変わった（写真③）。



③集合写真 戦後再開した長春の日本人学校 前から3列、左から4人目が筆者

しかし、間もなく国共内戦、八路軍（現人民解放軍）と国民党軍による国内戦争が勃発。長春はアメリカの援助の下、国民党の精銳部隊の支配下にあったが、徐々に困窮を究めて行く。当時近代的な戦闘を行うのは不利とみて、八路軍は正面切って国民党軍と対峙するのではなく、包囲網を張って持久戦に転じた。

父が手にする中国語の新聞には「^チ起義」（蜂起、寝返り）の文字が日々目につくようになる。八路軍は、土地改革を展開しつつ広範な農民を味方につけながら、戦闘を有利に進めていった。一方八路軍とは対照的に、国民党軍は徐々に孤立し、内部から瓦解が始まっていたのだ。

都市機能はマヒし、わが家も垣根のニレの葉っぱで飢えをしのぐありさまだった。国立長春大学に留用されていた日本人家族十数世帯と飢餓の町長春を脱出し、父の押すりヤカーを引いて「^チ子」に入ったのは1948年9月12日。チャーズとは、郊外の一角に鉄条網を張り巡らした中間地帯で、国民



④チャーズの出口でお粥を振る舞う八路軍兵士

りを持
ってき
くれた。
でも、
チャーズ
出ても安
心できな
い。1年
上の友だ
ちが流れ

党と共産党の暗黙の了解により、そこを經由せずに長春を脱出することはできなかった。
そこには数千人の難民がひしめいており、私たち一行が足を踏み入れた途端、新参者の到来とばかりに食糧を奪い、わたしの水筒もたちまち飲み干されてしまった。だが、食糧争奪の洗礼を受けたら私たちも同じ難民、地べたに横たわり、星空を見上げると、1年前に病死した母の顔が浮かんだ。
そこへ姿を現したのが、父たちを解放区に迎える任務を帯びた八路軍兵士。彼はかつて父の助手だった人の弟で、1年余り口にしていない白米のおにぎ

るのよう
だった（写真⑤）。そこ
を歩き交
う人民服
の女子大
生が輝い
て見えた。
わたしは、
いつしか父
同士が同じ

弾に当たって即死した。
ただ、チャーズの外には草が生えていて、わたしは土手の野蒜^{のびる}を抜いて白い根っこの泥を払って口にした。遥か向こうには野菜畑が広がり、少し歩いた所で、八路軍からお粥が振る舞われた（写真④）。

●新中国との出会い

徒歩、荷馬車、最後はトラックでたどりついたのは父の新たな勤め先、解放区吉林の東北大学（現東北師範大学）だった。住まいは広大なキャンパスの一角にある官舎で、チャーズ生活からすると御殿



⑤奥の建物が講堂のある主楼

生が演じる歌や踊り、「白毛女」などの芝居にいつしか夢中になる（写真⑥）。
そして幕あいに学生全員で歌う「団結は力」「東方紅」などの歌の意味も知らずに口ずさんでいた。遠慮がちに後ろで観ていると誰かが席を譲ってくれるなどみんなやさしく、わたしはそのとき初めて中国人を身近に感じた。彼らは、いつか見た可

大学教諭の幼友たちと一緒に「晚会^{ワンホエ}」（文芸の夕べ）があると聞くと講堂に駆けつけた。舞台でくり広げられる学



⑥映画「白毛女」より

哀そうな中国人とはまるで別な人種ではないかとさえ思った。

思えば敗戦後わずか3年、父は再び中国人学生を相手に教鞭を執るようになった。中国語を話せない父だが、教え子から教わった歌をよく口ずさんでいた。その哀愁を帯びた歌は、革命の烈士を偲ぶ鎮魂歌であることを後になって知った。

人民の紅い五月よ、紅い五月

無数の烈士が血を流した。

点々とした血と涙は幾千幾万の灯となって

革命家の道を照らすよ。

その後1年足らずで、大学が長春へ移転するのにともない、再び長春へ戻った。父の強い勧めで後に改称された東北師範大学附属小学校、また中学校へ編入学。そこはまるで吉林のキャンパスの延長線にあるような雰囲気だった。最初に覚えた歌は「勝利の花が咲くよ、咲くよ、人民政治協商会議が開かれるよ…」、つまり中華人民共和国の成立

が宣言される晩、1949年9月ごろに覚えた歌だった。

辞書などはない時代だが、好きな科目は「語文」（中国語）で、リズムカルな中国語の美しさに惹かれた。

“你听见过海啸吗？ 你听见过万岁毛泽东的声音吗”（あなたは津波の響きを聞いたことがありますか？ 毛沢東万歳の叫びを聞いたことがありますか？）で始まるエッセー、“^{ハイシアオ}海嘯”が津波などということも知らない、まして海の記憶もないので、津波そのものも実感が無い。だが、意味は二の次、そのリズム感が心地よく響いた。

当時の東北部は、ソ連重視の教育で、外国語はロシア語、ソ連の生物学者、バブロフが、犬を使っておこなった条件反射の研究について、生物の女性教師が熱っぽく語っていたのが忘れられない。

また女性の解放には「経済的な自立が欠かせない」など、のちに生涯仕事をするようになったのも、当時の教育の影響ともいえる。

ただ、こうしたソ連一辺倒の教育は、

1960年代に周恩来総理の提唱によって是正され、外国語も国連公用語の英語中心になったという（『人民中国』2022年2月号）。

思うに、飢餓の町、長春を脱出してたどりついた吉林、父が教鞭を執ることになった東北大学のキャンパスは、解放区の中の真の解放区だったのかもしれない。10年近くを中国で過ごした



⑧中学時代の筆者



⑦担任の張孟君先生

当時13歳のわたしが初めて感動した中国であり、肌で触れた中国人だった。そこで大学生活を過ごした学生たちが、やがて長春の附属中学校に派遣されて、教師になり、わたしは彼らの薫陶を深く受けた(写真⑦⑧)。

二 帰国・通訳の道へ

1953年、帰国のときが来た。暑い夏の日、親しい中国の級友たちが長春駅まで見送ってくれ、涙の別れを告げた。



◎1953年10月舞鶴にて 後列右が筆者

錦州で引揚船の高砂丸を待ち、帰国したのは10月。デッキから眺めた青い海に浮かぶ日本の緑の島々にすっかり魅せられた。舞鶴に到着、初めて自分の足で踏みしめた美しい大地だった(写真⑨)。

だが、良きにつけ悪しきにつけ、いま風にいえばわたしは帰国子女だったのだろう。特別な計らいで都立大学附属高校(現桜修館)に編入学したものの、学生運動華々しいところで、次第に「わだつみ会」(日本戦没学生記念会)や「歌う会」の活動に惹かれていく。そんななか、中国からの帰国者を対象にした通訳募集があり、試験に合格、やがて高校在学中に通訳の依頼がくると授業はそっちのけで中国の代表団に随行した。

例えば、1956年梅蘭芳京劇訪日団の公演に合わせ、ひと月半ほど舞台裏の通訳を務めた。まもなく刊行される『周恩来の足跡』(村田忠禧氏監修)によると、梅蘭芳は新中国設立を迎えて、自らの劇団の処遇などについて悩んでいた。それをいち早く察知した周

総理は、「新しい社会になっても伝統芸術は珍重され、あなたの活躍の場は、国内はもちろん、海外でも大いにある」と励ましたそう。梅蘭芳は日本公演を成功させ、日本中を大いに沸かせた。別れに際し中国側は、日本側の舞台関係者全員に京劇の衣装を着けて、銘々写真を撮りプレゼントしてくれた。何という粋な計らいだろう。わたしは今も大切に持っている(写真⑩)。



⑩別れの記念に一日京劇俳優



⑪原水禁世界大会訪日団団長として来日した故魯迅夫人の許広平さん

その後、原水禁世界大会に参加するため来日した魯迅の夫人で女性活動家の許広平さん、劇作家の曹禺さん…、随同行した著名人は枚挙にいとまがない(写真⑪)。

また、中国で出版する日本語雑誌『人民中国』の編集者からなる代表团は南から北へと100回に及ぶ読者座談会を行って、交流を深めるなど、これら草の根交流は、やがて日中国交正常化への道を切り開く土台を築いたと言える。

わたしは高校のときから生涯通訳の道を目指すつもりはなかったものの、結果的には中国語通訳者として生涯中国語と共に歩むことになった。それは通訳として代表团の方々と共に日本各地を回る中、起居を共にし、彼らの人柄にはれ込み、ますます中国にのめり込んでいった。その裏には、青年期を日本で過ごし、当時対日政策を指導していた周恩来総理はじめ日本通の廖承志氏(中日友好協会初代会長)らの深い見識によるところが大きかったと思う。わたしは、サブ通訳者として195

0年代に中国から派遣された代表团に随行し、仕事を通じて中国語に磨きをかけることができたが、東京外国語大学の入試は、1次試験の語学はともかく、5科目に及ぶ2次試験は滑った。思うに役立たずの駆け出しのころから数えると通訳歴六十数年、中国語研修学校やサイマルアカデミーの講師歴も50年近くを数えるが、わたしが今日あるのは、中国の偉人の言葉を借りれば「泳ぎの中で泳ぎを覚え、実践、理論、再実践…」の道を歩み続けてきたからにはかならない。いわば通訳の実践の中で語学力を磨き、理論とは、囲碁に喩えれば感想戦のようなもので、通訳をふり返って反省し、総括し、充電に努めた。

三 日中国交正常化50年にちなんで

●「迷惑」論

1972年9月29日、50年前の国交正常化の日、わたしは中国研究所所属の中国語研修学校で受講生たちと一緒に

に興奮冷めやらぬ思いでテレビを観ていた。

当時は中国の文化大革命の煽りで、代表团の来日も少なく、わたしは1968年4月から同校で中国語講師を務めていた。

正常化の後しばらくして、新聞を通し田中角栄総理の「迷惑をかけた」、それを通訳者が「添了麻烦」と訳したことによる問題発言を知った。ただ、「ご迷惑をおかけしました」と言われたら、多分わたしも「添了麻烦」ととっさに反応したと思う。

だが、その一言で、宴会場は一瞬にして白けムードが漂ったという。これでは、まるで女性のスカートに水をかけ、「濡らしてしまつてごめんなさい」程度に謝ったに過ぎず、8年に及ぶ日中戦争(中国では抗日戦争)によって多くの惨禍を被り、数千万人に及ぶ人々が犠牲になった戦争の代償への謝罪の言葉ではないとして中国側が激怒したそうである。田中総理は、「『ご迷惑をおかけした』というのは、日本人が心から謝罪をするときに使う言葉です」

と周総理に説明したそうだが、日中双方が口角泡を飛ばし激論をおこなったことは想像に難くない。

その後、深夜に突然、田中総理と周総理が毛沢東主席の部屋に呼ばれ、毛主席は2人に向かって「喧嘩はもう終わりましたか？」と聞いたとか。

その後、毛主席がにこにこしながら『楚辞集注』を田中総理に贈呈し、レモニーは終了。雨降って地固まる、双方はこうして和解にこぎつけ、日中正常化の道は固まったようである。めでたし、めでたし。

●切り立った稜線を行くが如く

1990年からわたしはNHK・BSのCCTV（中国中央テレビ）ニュース番組の放送通訳のほか、フリーの通訳者として仕事をした。

エージェント経由で頼まれる仕事は、中国や台湾地区での会議通訳、また政界の要人に同行しての訪中もある。なかでも総理の通訳としての訪中は、まるで切り立った崖の稜線でも歩くかのようで、一歩誤れば奈落の底、正確さ

が過酷なまでに要求される。そして一方では情報を即刻、茶の間に届ける必要に迫られる。

1994年に細川護熙総理はじめ、その後橋本龍太郎、小渕恵三総理の中国訪問に当たり、北京で記者会見の通訳を務めた。外務省の慣例として外部の通訳者が担当するのは、外国訪問の最後のまとめともいえる記者会見の通訳のみ。両国首脳の会談や、各地の視察などはすべて外務省の通訳者が担当し、3日間の訪中なら、その締めくくりの最終日の一時間ほどの記者会見が外部通訳者の出番である。

最初の細川総理の記者会見のときは同時通訳ではなく、逐次通訳で行われた。まず事前に首相官邸へ出向いて顔合わせがあり、外務省の随行スタッフ数人と一緒に執務室を訪れ挨拶をする。小1時間のミーティング、スタッフが訪中の趣旨などを総理に説明するのを拝聴した。

だが、訪中の日が近づくに連れて、不安が募る。テレビのニュースなどで

細川総理を見かけたりすると、すかさず聞き耳を立てる。また総理がアメリカを訪れた際、記者会見の通訳を務めた英語通訳者にも尋ねてみた。「何が大変って、話が長いよ。切れ目が無いの：」、この一言はわたしにとってかなり衝撃的だった。総理の通訳をする以上、一つ一つの訳語に注意を払うのはもちろん、全体の流れをつかんで忠実に、言い落しがないように最善を尽くさなければならぬ。話が長くなると通訳はどうしてもおおざっぱにならざるを得ない。

そこで北京に着いてから記者会見を取り仕切る報道官に率直に質問してみた。「首相は、スピーチが始まると淀みなく話されると伺ったのですが、それが心配です」「そのときは割って入ってけっこうですよ」報道官の答えはいつも簡単だった。

「割って入る？」、これはあたかもわたし慣れ親しんだトランプ遊び「ノーランプ」のジョーカーのようなもの。土壇場でジョーカーを使ってリスクを回避するか、使わずに温存させるかど

うかの決断を迫られる。

ところがいざ記者会見が始まったら、意に反して早々に使わなければならぬ羽目に陥った。冒頭の挨拶の部分は一応内容を知らされていたので多少長くても差し障りはないのだが、質疑応答に入ってからかなり長く話される。舞台の裾から「そこまでにしてください」という気持ちを込めてそれとなく右手を差し出した。首相はすぐに気付いて話を止めてくださった。フォルクスワーゲン（「大衆自動車」）などメーカー名やいろいろな単語が出てきたが、そこはどうか切り抜けることができた。

だが、その後も期待したほどジョーカーの効果は続かず、朝鮮の核疑惑の問題など、第一、第二、第三という具合に熱がこもり、切れ目なく延々と続く。わたしはまたもや「待った」をかけたくなったが、首相の話をそうむやみに遮るわけにはいかない。このような葛藤の中、記者会見の通訳は終わった。この記者会見の様子は、NHKでかなり大々的に実況放送され、日曜の大相撲の後というせいもあって、高い視

聴率だったようである。

「声ですぐに判りましたよ」という励ましの言葉とともに、同僚からは「首相の言葉を遮ったそうじゃないですか、よくやれますね」といったやや非難めいた声もあった。通訳者には守秘義務があるが、すでに時効、「割って入った」のは、暗黙の了解を得てのことである。

ただ、せっかく楽屋裏でいただいたジョーカーだが、舞台では乱発するわけにはいかなかった。

それにしてもこの会見では、先の戦争についてとかく齟齬が起きやすい「ご迷惑」という言葉はなく、「戦争の責任を痛感し、深く反省する」と表明されたのでありがたかった。

●友情よ、永久に！

では、正常化から50年を迎えた昨今の日中関係はどうだろうか？

思えば、めざましい発展を遂げた中国の光の部分とともに影の部分も浮かび上がってくる。中国は切り口によって様々な顔が見えてくるので、その捉

え方がまちまちであることは否めない。

だが、5千年の歴史をもつ中国への尊敬の念を忘れてはならない。たとえ年号「令和」の語源が『万葉集』に由来するとしても、私たちが日ごろ愛用している漢字はもともと中国から伝来したものにほかならない。

また、メディアの影響も大きい。世界に国家というものが存在する以上、メディアにそれぞれの立場が存在するのは、当然だと思う。だが、日本のメディアがすべて公正公平で、民主的だとはいえない。NHKには素晴らしい番組があるのは事実だが、ニュースの取捨選択において政権の意向に左右され、必ずしも客観的とはいえない場合もある。わたしが通訳してきたCCTVのニュースでは、中国が人道的な立場からウクライナに医薬品などの支援物資を送っているというトラック輸送の30秒足らずのシーンでさえ、採用するか否かについて、現場では決められない。

ましてや一方的に「沖縄県大閣諸島」と表示するのは、国交正常化によって

なされた暗黙の了解に背くのではないだろうか。これでは世論を「相互誤解」へと誘う可能性もある。いまこそ初心に返り「小異を残しつつ大同に就く」べきではないだろうか。次に担当した小淵総理の記者会見でも、朱鎔基総理の『言は必ず信あり』（約束は必ず守る）、実際の行動で示してほしい」という言葉を引用し、強調されている。

最近の世の中の動きをみていると、およそ80年前に戦争を仕掛けたのは、どこの国だったのか忘れてしまったかのようにすら感じる。1960年、反安保闘争が華々しく行われていたころ、中国の陳毅副総理兼外相は、中国を訪れた野間宏氏を団長とする日本の作家代表団に次のように言ったそうである。「仮に中国が過去の戦争にこだわって日本を憎しみ続け、一方日本は過去の戦争をすっかり忘れ去ってしまったら、両国は仲良くやっていけません」。いま私たちは、60年前のこの言葉を



⑫同級生たちと北京の張孟君先生宅を訪問（2015年5月）

もう一度、反芻すべきではないだろうか？「敵基地攻撃」を、「反撃」と言い換えたところで、かつて人様の国土を踏みにじったのは、いったいどの国だったのだろうか。世界情勢がいかに

に変化しようとも、憲法の手精神を守り抜き、隣国同士の子々孫々に続く友好を願わずにはいられない。

わたしの母校、長春の附属中学時代の級友たちとの友情は70年経った今も続き、中国版SNSを通じて交流している。友だちグループの名称は「友情よ、永久に！」である（写真⑫）。

（2022年12月8日・公開講演会）

筆者略歴（かんざき たみこ）

東京都生まれ。幼年期に中国へ渡航、1953年帰国。都立大学附属高校卒業。北京・人民画報社、銀行通訳などを経てフリーの通訳者に。2022年3月NHK・BS放送通訳退職、通訳歴60数年。またサイマルアカデミー講師を務める。2022年6月JACI（日本会議通訳者協会）「特別功労賞」受賞。編著書に『中国語通訳トレーニング講座―逐次通訳から同時通訳まで』『中国語通訳実践講座』、神崎勇夫遺稿集『夢のあと』（いずれも東方書店）。